

葛重・馬琴・写楽・越谷新聞

令和7年8月15日・第8号・写楽と越谷・おさらい号・発行・旧日光街道・越ヶ谷宿を考える会

令和7年 **8月30日(土)**

午後1時半～午後3時半

中央市民会館 劇場

《講師》

國學院大學

中村正明 教授

《内容》

—江戸時代中期以降、江戸の町は成熟期を迎え、本屋(板元)も精力的に活動をはじめた—
そうした数多い板元の中で、葛屋重三郎をはじめとする、活躍した板元とその出版活動について紹介します。

堂書村



葛屋重三郎と江戸の本屋さん

令和7年度文化財講演会



黄表紙『金々先生栄花夢』
国立国会図書館所蔵

この講演を聴いて、この新聞を読んで、葛重・写楽・江戸・越谷をお楽しみください!

越谷市教育委員会生涯学習課

電話:048-963-9315

《共催》

NPO法人越谷市史研究会・越谷市教育委員会

電話ください



『画本東都遊』葛屋重三郎店先
国立国会図書館所蔵

邪馬台国の謎・卑弥呼の謎

そして写楽の謎



写楽・
市川鯉蔵の竹村定之進

ピラミッドの謎というのもありますね～「歴史の謎」というのは、ホントに面白いものですね。時の流れの中で、ヒトの歩みの「ある個所」が分からなくなってしまうものを、専門家も素人も真面目に解きにかかる～

いまから、わずか230年ほど前の寛政6年（1794）、あの世界の美「浮世絵28点」を発表し、その後、肖像画を10カ月間に110枚ほど描いて姿を消した東洲斎写楽。彼も、「歴史の謎」を残したヒトでした。

彼のことを一番よく知っていたキーパーソン・蔦屋重三郎が、写楽が消えて2年後の寛政9年（1797）に脚気で亡くなってしまったのです。

東洲斎写楽の謎

当時の文化の華であった4大浮世絵師といいますと、歌麿・北斎・広重と写楽。その写楽が「歴史の謎」だといいましたが、写楽の何がわからないのか、「歴史の謎」なのか。いや、ホントにすべてがわからないのです。

○ホントに、写楽というヒトがいたのかさえ、わからないのです。どこで、いつ生まれたのか。○どこに住んでいたのか。○浮世絵師というが、師匠は誰なのか。あれだけの絵を描くことを教えるのは、師匠はそれ以上の能力を持っていなければいけないのだが～ ○どうして、ああいう絵を描けるようになったのか。 ○蔦重のところから絵を売り出したのだが、

写楽の謎を解くために～



写楽・
二代目坂東三津五郎の石井源蔵

なかなか、本物の写楽が 50 人以上の候補者が出てきて、写楽本が何冊も出て、なおかつ、結論が出なかったところ、ようやく、決着がついたのには、三者の執念とお力がありました。

内田千鶴子さん、中野三敏さん、「NPO 法人徳島写楽の会」の皆さまです。

まず、内田千鶴子さん。《1966 年生まれ・映画監督・故・内田吐夢氏次男・有作氏と結婚し、1979・写楽の研究を始める》

内田さんは、義父・内田吐夢監督のシナリオライター・水木洋子さん宛ての写楽に関するシナリオの依頼状を偶然に見つけ、それから写楽に興味を持たれたようです。NHK テレビの「能役者・斎藤十郎兵衛」番組への協力から「能役者・十郎兵衛」の追跡が始まりました。「能役者」の探索によって、当時の阿波藩能役者は 1 年ぐらいのお暇時間があつたようだから、写楽が、まさに絵を描いていた寛政 6 年（1794）に十郎兵衛は 33 歳の男盛りであつたなどを突き止められるまでに進まれたのです。

国学者・村田春海の弟子・清水浜臣の『泊はるみ百舎年譜』に「錦織 斎さざなみのや（春海の号）は、春海、たせこ、春路ししごりのやのあるじにて絶ゆ。たせこは弘化 4 年 12 月 12 日没す。養子春路は阿波侯能楽師斎藤与右衛門の子」との記事ありとの引用もされています。＝この「たせこ（多勢子）」は、越谷・恩間の渡辺荒陽ようの娘で、村田春海の養女となったヒト。自分も結婚しなかったので、お隣の春路を養子としたのです＝

中野三敏さん。《1935 年生まれ・元・九州大学文学部教授・元・福岡大学教授、江戸文化・江戸文学の専門家。2019 年死去》

中野さんは、写楽の絵そのものも、それほど好きでもない～と言われ、研究も写楽という絵師の実像の跡追いの過程であるともおっしゃっておられました。齋藤^{げっしん}月岑^{そうは}著の「増補・浮世絵類考」(天保 14 年・1843) を柱に「江戸^{ほうがくわけ}方角分」「八丁堀絵図」などから、写楽の原像を追跡され、文献上で、十二分の成果を収めていただきました。

それに、NPO 法人・徳島写楽の会の皆さまです。《1997 年設立です》

写楽と考えられる齋藤^{とけいのまぼん}十郎兵衛^{めいちくごけにん}は土圭之間番という名目で御家人として召し抱えられているようだが、もしかすると「御家人として、『寛政重修^{かんせいちょうしゅう}諸家譜^{しよかふ}』に菩提寺^{ぼだいじ}に関することも掲載されているかも知れないと思いつかれたメンバーがおられたのです。そして、徳島県立図書館で『諸家譜』を調べると、確かに「築地^{つぎじ}本願寺^{ほんがんじ}法光寺^{ほうこうじ}」と出ているではありませんか。

電話局と本願寺に問い合わせられて、法光寺の越谷移転が判明。法光寺への電話で、齋藤家の過去帳をお持ちのことが分かりました。

その過去帳には、まさに「八丁堀地蔵橋^{あしゅうどの} 阿洲殿御内 齋藤十郎兵衛」と「増補^{そうは}・浮世絵類考^{うきよえ るいこう}」と同じことが書いてありました。これによって、「浮世絵類考」のウラが取れたのです。

このようにして、やっと、齋藤十郎兵衛が実在の人物であるということが確認されたのです。まだまだ、写楽の謎は残っていますが、しかし、これだけの証拠で、とりあえずの齋藤十郎兵衛の実在が確認されたのです。

いつ、どうして蔦重と結びついたのか。○なぜ、どうして、絵を描くのをやめたのか。○その後は、どこへ行ったのか。

ホントにわからなかった写楽

写楽とは、どんなヒトだったのか、わからなかったのです。写楽は寛政6年（1794）5月に有名な役者絵28点を最初に出版し、翌年1月に140点ほどの作品を出しおわるまで、約10か月しか画業にタッチしておらずその前に絵を習った師匠の名も不明。師匠がいたかも不明。

写楽が世の出現した最初があの絵だったのですから、みんなが驚いたのは、むしろ当然のことでしょう。

独学というか、自己流というか、生まれつきの才能があったのでしょうか～蔦重の「さあ描け、もっと描け」という指導で、伸び伸びと描いた作品は、蔦重が惚れ込む傑作でした。（写楽には1～4期あるのですが、28枚の1期以外のものは、無視した方がよいと思われます。）

写楽の絵の、あの凄さは大天才でないと描けないという考え方があります。どれだけ修練に年月をかけても、あの絵は描けないだろうと思われます。しかし、描ける才能のあるヒトなら修練も指導もなく描ける絵ではないでしょうか。写楽の絵を描けるヒトは北斎とか歌麿とかの大名人でしかない～と、写楽を、絵の才能をもったヒトから探そうとした方も多かったのですが、北斎、歌麿、応挙、文晁、豊国、抱一・・・しかし、画風などで「写楽」を決めること、それはとてもできないことなのです。

「アート・ビギナーズ・コレクション もっと知りたい東洲斎写楽」

(田沢裕賀^{たざわひろよし}著 東京美術 2024.11 刊) の田沢先生 (東京国立博物館学芸企画部長、特任研究員。大分県立美術館長) の「現存では、これらをもとに、阿波徳島藩主・蜂須賀家お抱えの能役者斎藤十郎兵衛 (1763~1820) が東洲斎写楽であるという説にほぼ落ち着いている」だけに落ち着かれずに、早く「~という説に決定した」と言い切っていただきたいのですが~

越谷市民からの東洲斎写楽さんへのお礼

☆越谷市民としては、あつというような展開でした。写楽という4大浮世絵師の一人が、越谷に縁があったヒトだったのです。

☆写楽が写楽であった最重要証拠をもった浄土真宗^{じょうどしんしゅう}・本願寺派の法光寺さんが、越谷に引っ越してきていただきました。この「過去帳」という証拠で、写楽の実在が判明したのです。

☆二百数十年前に八丁堀地藏橋の写楽のお隣の村田春海宅へ養女に入っただのが、越谷・恩間の国学者・渡辺荒陽の娘の多勢子。多勢子さんは、のちにお隣の写楽の息子・春路^{はるみち}クンを養子にしたのです。渡辺家は春路クン没後も、養子を村田家に入れておられます。

☆本当に、何というご縁でしょうか。はからずも、ピカソやモネにも比すとも劣らない優れた絵画を人類に残してくれたヒト、写楽さんと越谷市とのご縁があったのです。こんなうれしいことはありません！ 写楽さん！ホントに、ホントに、ありがとうございます。